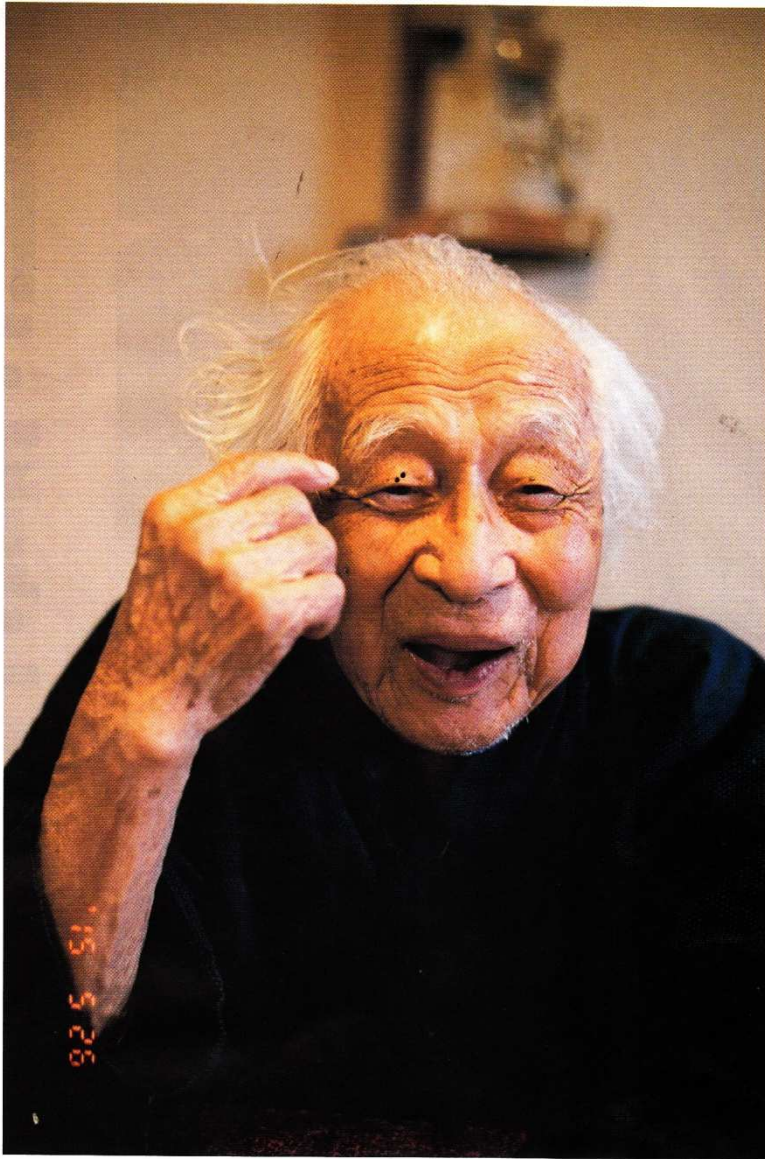


100歳のジャーナリスト むのたけじさん

人阿水と空

光と平和を愛した
あのたけじ



戦後70年を迎えた今年の夏、むのたけじさんは例年以上に多忙な日々を過ごしました。

横浜、長野、石川、東京……。毎週のように各地で講演をこなし、毎月のように新刊書籍を出版。その合間に原稿を書き、打ち合わせをし、そしてマスコミの取材を受けます。戦前から新聞記者として活躍し、太平洋戦争の従軍取材も経験したむのたけじさんの言葉がいま、切実に求められているのです。

21歳で新聞記者になってから、今年で80年。長く「現役」を続けられる秘訣を伺うと、「よく食べて、よく眠ること。平凡だけど言うしかない」とおっしゃいます。

しかし、87歳で胃がん、92歳で肺がんを患い、その後も不整脈、眼底出血と大病に見舞われます。それでも、「自分の命には自分で責任を持つこと」と、肺がんの際は抗がん剤の治療を自らの意思で拒否。「病氣は敵じゃない、病氣も自分の味方だ」とがんに名前をつけ、眠る前に「そこにもいいけどな、乱暴すると俺たちは一緒に火葬場行っちゃうからおとなしくしているよ」と呼びかけていたそうです。

その大きな声は止まることを知りません。旧知の写真家・木村伊兵衛さんとの思い出を語り、安倍政権の進める安保法制を「とんでもないこと。ほんとうに危険な状態」と批判します。

執筆活動も旺盛で、「色紙一枚に、本一冊分の内容を書き込む訓練をしている」と書き連ねた色紙はすでに3000枚を超えています。「最後に『哲学小説』を書いて死のうと思っているんです」とおっしゃりながら、原稿を書く姿も見せてくれました。

主治医から「まだ死ぬわけにはいかないという仕事を持っているから、何度でも生き返ってくる」と言われたむのたけじさん。その存在感は、100歳を超え年齢を重ねることに増すばかりです。

本名・武野武治／1915年（大正4年）、秋田県の農家に生まれます。東京外国語学校（現・東京外国語大学）を卒業。報知新聞をへて朝日新聞の記者になります。45年8月、戦争責任を感じて退社。48年に秋田県横手市で週刊新聞『たいまつ』を創刊し、30年間発行します。休刊後も執筆活動を続け、『100歳のジャーナリストからきみへ』（共著、全5巻、汐文社）を現在発行中。

